

Utterance と Sentence*

服 部 四 郎

英語の utterance および sentence という語は、言語学者によっていろいろの意味に用いられるので、それぞれの場合について、その意味を把握するよう努力しなければならない。その意味の定義が明示されていないことが少なくなく、sentence は索引に出てくるけれども utterance は出て来ない、というようなこともある。

私は、utterance に対する日本語を「発話」、sentence に対する日本語を「文」と決め、「発話」と「文」とはレベルを異にする概念であると定義し、もう4分の1世紀以上も前から、¹⁾この両者を区別する必要があると、力説してきた。

私の定義に従えば、発話とは、音声言語表出活動（内部的な心理活動と外部的な行動とを含む）とそれによって生ずる音声のことであって、それは1回きりの出来事であり、同じ発話が2度起こることはない、と想定する。同じ個人が意図的に同じ発話音声を発しようとしても、繰返えすごとに少しずつ違ったものとなることは、たとえばソナグラフを用いての実験によっても明らかになっている。従って、「あの人は毎日同じことばかり言っている」と言っても、完全に同じ発話音声を発しているわけではない。まして、「口を揃えて同じことを言った」と言っても、各人の発する発話音声には大きな差異がある。老人がしゃがれ声で『きょうはいい天気だ。』と言ったのと、声変わりのしない子供が同じことを言ったのとでは、音声が著しく異なる。それにも拘らず“同じこと”というのは何故か。それは、それらの発話音声に繰返し現われる「同じ」特徴があるからだ、と想定される。一人の個人についてならば、その人の個人的な発音の特徴（個人習慣的特徴を含む）も「繰返し現われる特徴」の中に含まれよう。しかし、数名の個人の「同じ」発話音声に「繰返し現われる同じ特徴」とは、個人的な特徴を捨象した、それらの発話音声に現われる共通の特徴を指す。それは、日本語の発話ならば、日本語的特徴であり、日本語の langue 的特徴である。これを「社会習慣的（言語的）特徴」²⁾と呼ぶことにしよう。数名の個人が「同じこと」を言ったという場合には、それらの発話音声に同じ「社会習慣的特徴」が含まれていると想定されるのである。

これを「言語作品」（linguistic product）と呼ぶ。すなわち、どの発話も言語作品を含んでいるわけである。言語作品は1つ或いはそれ以上の「文」（sentence）から成っている。何を以て1つの文とするかという点に関する考察は、今回は省略しなければならない。³⁾

以上は音声の面についての考察だが、発話の意味——これは発話者の内面的心理活動に関係するが——についても同様のことが言える。たとえば、「キョーワ イイ テンキダ。」⁴⁾という文を含む発話は、日本中の方々で発せられるであろうが、「イイ テンキ」という文断片の指す内容は、日によって、同じ日でも時間によって、また場所によって、それぞれ異なる。すなわち『きょうはいい天気だ。』という発話の意味は、発話ごとに完全には同一ではない。それにも拘らず、それらには共通点がある。たとえば、『きょう』という発話断片は色々な日の色々な時間を指し示し得るけれども、いずれもその発話の発せられたその日を指す。『いい』というのも何らかの観点から発話者にとって好ましい特徴が存在することであり、『天気』というのは或種の気象現象を指す。

また例えば、私がこの本を手にとって『この本は……』と発話した時、『この本』という発話断片は正にその物体を指し、それ以外の物体は指し示さない。しかし私は、他の本を手にとって『この本は……』と発話することもでき、その場合の『この本』という発話断片は全く別の物体を指す。しかし、この両者に共通の点は、それらの物体が私の手に取られている或種の物体ということである。しかし私は、本を手にとらず、机の上の本を指して『この本は……』ということもできるから、これら3つの場合に共通の点は、私に近い所にある或種の物体ということである。ところが、私以外の個人も『この本は……』ということができるから、種々様々の発話の『この本』という断片の意味に共通の点は、発話者に近い位置にある『本』と称せられる共通の特徴を有する物体、ということになる。これを「コノホン」という文断片の「意義」と呼ぶことにしよう。ある文を含む発話の「意味」は具体的であっても、その文の意義は抽象的である。

このように種々様々の発話が「同じ文」を含んでいることがあるから、文は発話からは独立である。そこで興味あることが認められる。まず、発話の「意味」とはその発話者が伝達しようとした意識内容である、と定義することにしよう。その発話の意味を表出する者、その意味の保証者は発話者（utterer）であるが、ある発話が1つの文を含んでいるとき、その文の意義は文末で一応完結するから、その意義の保証者というものを抽象的に考えることができ、これを「表現者」（expresser）と私は呼んできた。⁵⁾

発話者と表現者は重なり合うのが普通であるけれども、分離することもある。たとえば、『僕の所には古代ギリシャの霊がある。』といて嘘をついた場合、この発話の発話者と、この発話に含まれている「ボクノ トコロニワ……ガ アル。」という文の表現者とは分離している。この文の表現者はこの文の意義を保証しているとせざるを得ないのに反し、この発話の発話者はこの発話の「意味」を保証しているように見せかけているだけであって、彼がこの発話によって伝達しようとした「意味」以外の意識内容を、彼は匿し持っているわけである。⁶⁾

詩はその作者を離れて独自の生命を有する、と言われるのも、詩の表現者と詩の発話者とが分離し得ること、厳密に言えばこの両者が別であることを言ったものではなからうか。

文字言語表出活動についても、音声言語の場合と同様の現象が認められるが、事情が多少異なる。音声言語の発話音声は、ふつうその場に居合わせる聞き手に向かって発せられるもので、その場で消失する。（録音、ラジオ、テレビ、等については多少事情が異なるけれども。）これに反し、文字言語表出活動の結果生ずる文書は、ふつうその場に居合わせない人々に読ませるために書かれるもので、紙などに書かれた形で残り、発話音声のようにその場では消失しない。手紙や原稿などでは、筆跡や書き直しの仕方などから、筆者の表出活動を推測し、その文書に含まれる言語作品をよりよく理解するための参考とすることはあるけれども、ふつうは言語作品だけが理解・解釈の対象となる。⁷⁾特に版を重ね版を改めた文学作品あるいは作者の自筆本の残っていない文学作品などは、ほとんどそこに含まれる言語作品のみが理解・解釈の対象となる。

音声言語表出活動の場合には、発話に含まれている言語作品ばかりでなく、発話全体が理解・解釈の対象となり、発話活動そのものとその発話の行なわれた場面とがそのための不可欠の手懸りとなるが、そのほかに、その文に先行（あるいは後続）する文、すなわち言語作品そのものの文脈、およびそれを含む発話の文脈、ならびに場面の脈絡も重要な手懸りとなることがある。文字言語作品の場合には、その書かれた書写活動やその場面は、読者には

知られないのがふつうで、言語作品そのものの文脈が最も重要な手懸りとなる。

しかし、和歌や俳句のような短い言語作品においては、手懸りとなる文脈がないのがふつうで、そのため理解が困難な場合があるから、まえがきなどを付けて、場面を示唆することがある。俳句における季語の如きは、一定の約束を決めておいて、読者もそれを知っていることを義務づけておき、言語作品そのものの中に季節に関する理解の手懸りを包含させて置こうとする約束ごとである。そのような取り決めは、一般人の言語習慣から離れた点が多くなるほど、俳句を専門家のものとし、一般人の近づき難いものとする。発話音声の場合には、発話者その者が一つの大きな場面であるが、和歌や俳句の場合でも、作者が示されていることがその言語作品理解のための大きな示唆となる。場合によってはその言語作品に価値を付加することさえある。

古池や蛙跳び込む水の音

この句は芭蕉の作である所に大きな価値があり、それだけに深い俳諧的境地を伝え得るのではなからうか。もし私がこれを創作し、ここで初めて発表したとしたら、どれだけの反響を呼ぶことができるであろうか。作者としての芭蕉の名前は、この言語作品そのものの表わす意義の上に、ある種の意味を付け加えているのである。また、大文豪の作品に見られる文法的反則は、已むに已まれぬ表現手段であるから、そういう反則的表現の表わす微妙な意味のニュアンスを理解することが要請される。ところが、同じ表現を、日本語を十分知らない外国人が用いたとしたら、文法的誤謬として直ちに朱筆を加えられるであろう。

さて、たとえば俳句にも、それだけで十分意義を伝え得るものと、文章の中にあって、文脈とそれのかもしれない出す擬似場面に著しく依存したものとある。同じ『奥の細道』の中に出てくる句でも、

五月雨を集めて早し最上川

荒海や佐渡に横たふ天の河

の如きは前者で、

かさねとは八重撫子の名なるべし

の如きは後者であろう。

音声言語活動においては、発話の表わす意味全体を伝達し理解することが当時者たちの最大関心事であり、一方、文字言語による伝達と理解においては、ほとんど言語作品そのものが唯一の手段・媒介であるから、一般の人々にとっては、発話から言語作品を抽出するということは、ふつう思いもよらぬことのようにである。しかし、一般の人々がそういう分析的心理活動を全くやらないのでは決してない。たとえば嘘をその場で見破る如きはそれである。また皮肉の表現においても、表現者と発話者が分離しているが、皮肉の意味を理解するということは、この両者の分離を確認することである。⁸⁾

また、甲の手紙を乙に読ませて聞く場合、そこに生ずる発話の音声は乙のものであるけれども、そこに含まれている言語作品は甲のものである。このような分析的理解活動は何びとも日常茶飯事としてやっている。こういう場合には、表現者の甲と発話者の乙とが分離していることが、何びとも理解されているのである。ところが、このような理解活動は、知性の或程度の成長・発達を必要とするもののようにである。数か月まえ、3才半の孫(長男の長男)に初めて短い手紙を書いた。それを私の長男が読んで聞かせたところ、私の言葉だということが、孫に十分理解されなかったという。父親の発話音声の中に含まれている祖父の言語作品を、分析してそれが祖父のものだと認知することが、彼(私の孫)にはできなかった

のであろう。

発話から言語作品(および文)を抽出することは、以下にも述べるように、言語を分析的に研究する上で極めて重要であると私は考えるのだが、この点に気付いている言語学者は、私の知る範囲では、意外と少ないように思う。特に著名な言語学者にそれが少ないのではなからうか。

たとえば、Hermann Paul は *Prinzipien der Sprachgeschichte* で *usuelle Bedeutung* 《慣用的意味》と *okkasionelle Bedeutung* 《臨時的意味》とを区別しているが、「文」と「発話」に当たる区別を説いていない。⁹⁾

Ferdinand de Saussure は *Cours de linguistique générale* で *parole* と *langue* の区別を力説しているが、*parole* は私のいう「発話」に当たるけれども、*langue* は「文」に当たるのではない。ただし、これについては後に細説する。

Alan Gardiner は *The Theory of Speech and Language*, 1951² で de Saussure の説を敷衍して、*speech* すなわち *parole* と、*language* すなわち *langue* とを区別すべきことを力説しているけれども、*speech* において私の言う「発話」と「文」「言語作品」とを区別しないために、困難に陥っている場合がある。¹⁰⁾ 彼に従えば、

the 'word' is the unit of language, whereas the 'sentence'
is the unit of speech

である(p.63)。

Roman Jakobson に従えば、de Saussure の *langue* と *parole* の区別に先んじて、Baudouin de Courtenay が *jazyk* と *reč'* の区別を説いており、最近の *less ambiguous* な術語の *code* と *message* は de Saussure の (*code de*) *la langue* と *parole* に当たり、さらに Chomsky の *competence* と *performance* に当たるとしている。¹¹⁾ しかし、私の言う「発話」と「文」「言語作品」との区別に当たる区別を明瞭には説いていない。

André Martinet も *Éléments de linguistique générale*, 1960, 1961², 1963³ の p.30 で *langue* と *parole* の区別は *code* と *message* のそれに等しいとして、次のように説いている。

Mais il lui 【au linguiste】 faut nécessairement supposer l'existence d'une organisation psycho-physiologique qui, au cours de l'apprentissage de la langue par l'enfant, ou plus tard, s'il s'agit d'une langue seconde, a été conditionnée de façon à permettre l'analyse, selon les normes de cette langue, de l'expérience à communiquer et à offrir, à chaque point de l'énoncé, les choix nécessaires. C'est ce conditionnement qu'on appelle proprement la langue. Cette langue, certes, ne manifeste son existence que par le discours ou, si l'on préfère, par des actes de parole. Mais le discours, les actes de parole, ne sont pas la langue. L'opposition, qui est traditionnelle, entre *langue* et *parole* peut aussi s'exprimer en terme de *code* et de *message*, le *code* étant l'organisation qui permet la rédaction du message et ce à

quoi on confronte chaque élément d'un message pour en dégager le sens.

すなわち、paroleあるいはmessageにおいて私の言う「発話」と「文」「言語作品」との区別を認めているとは考えられない。

Emile Benvenisteは、第9回国際言語学者会議(米国 Cambridge, 1962)における Les niveaux de l'analyse linguistique と題する report において、言語分析には niveau の概念が不可欠だとしながら、彼の une unité (la plus haute) である phrase は、私の言う「文」でなければならないのに、むしろ「1つの文を含む発話」であるように見えた。いずれにせよ、「文」と「発話」の niveau は区別されていなかった。¹²⁾

さて、de Saussure の langue と parole の概念と、私の考え方との大きな違いは次の点にある。

彼に従えば、langue は「社会的なもの、本質的なもの」であり、parole は「個人的なもの、副次的で多少偶然的なもの」であり (Cours, p. 30)、langue は「本質上、等質的である。それは記号の一体系であり、意味と聴覚映像との連合の外に本質的なものはなく、而も記号の2つの部分【即ち signifiant と signifié】が共に心理的であるところの記号の一体系であって (p. 32)、個人の脳裏に蓄えられているのに対し、parole は個人の exécution 《遂行》で (p. 30)、1回きりのものであって、大体私の言う「発話」に当たる。

これに反し私は、「発話」は1回きりのもので個人的な実質であるけれども、そこに繰返し現れる社会習慣的な、langue 的な特徴が認められる説き、それを「言語作品」と呼ぶ。一方、脳における心理活動も1回きりのもので個人的な実質であって、そこに繰返し現れる社会習慣的なもののみが、de Saussure の langue に当たるのである；脳裏にあるものすべてが社会習慣的なのではない、と私は説く。

ところが、さすがに de Saussure は注意すべきことを言っている。

La parole est au contraire un acte individuel de volonté et d'intelligence, dans lequel il convient de distinguer: 1° les combinaisons par lesquelles le sujet parlant utilise le code de la langue en vue d'exprimer sa pensée personnelle; 2° le mécanisme psycho-physique qui lui permet d'extérioriser ces combinaisons. (p. 31)

この combinaison は私の言う「言語作品」「文」に近い概念であるが、私のように「発話」(音声を含む) そのものの中にそれがある、とはしていない点が異なる。

Leonard Bloomfield の Language, 1933 における分析的観察は精緻なものであるけれども、用語とその定義に明確を欠く点がある。

まず、私の言う「発話」のレベルに相当するものを求めると、p. 23, 1.7 の speech および p. 74, 1.14 の actual speech が私の言う「発話の音声」に当たるように見える。また彼が an act of speech-utterance (p. 22, 1.-7) と言い、the act of speech (p. 23, 1.3) と言っているのは、私の言う「発話行動」に当たるようだが、p. 23 の始めには speech=act of speech ともとれることを言っている。ただし、彼は行動主義理論に従って、私の言う「発話の意味」を practical events preceding the act of speech (A) に含ませ、speech (B) からは全く切り離しているのである。

さて彼は、the fundamental assumption of linguisticsをp.78とp.144の2箇所 formulate しているのであるが、多少表現が違っている。

(p.78) in every speech-community some utterances are alike in form and meaning.

(p.144) In certain communities (speech-communities) some speech-utterances are alike as to form and meaning.

従って utterance = speech-utterance となり、上述の如く speech = speech-utterance ととれることを言っているのだから、utterance は私の言う「発話」のレベルにあるものと認められる。そして、

(p.170 中程) An utterance may consist of more than one sentence.

と言っているところを見ると、彼の sentence は私の言う「文を含む発話(断片)」とも解し得る。

一方、

(p.145) Our fundamental assumption implies that each linguistic form has a constant and specific meaning.

と述べているが、この linguistic form は、私の言う「単語」「形式」のような抽象的な概念とせざるを得ないであろう。また

(p.172) when a favorite sentence-form is used as sentence, ... と言っており、この sentence-form が私の言う「文」に当たる概念かとも思われようが、p.167 の 10.6. では

Any utterance can be fully described in terms of lexical and grammatical forms;

としており、さらに

(p.168) A form like John or run, mentioned in the abstract, without, for instance, any specification as to final-pitch, is, properly speaking, not a real linguistic form, but only a lexical form; a linguistic form, as actually uttered, always contains a grammatical form.

と言い、次いで grammatical forms は 3 種に大別できるとして、そのうちの 1 種類について次のように述べている。(p.169)。

When a form is spoken alone (that is, not as a constituent of a larger form), it appears in some sentence-type. Thus, in English, the use of the secondary phoneme (!) gives us the sentence-type of exclamation, and the use of a substantive expression gives us the type of a call (John!)

従って、彼の言う sentence-form にこの grammatical form が加わったものが、私の言う「文」に当たるかと思われるが、それと utterance との関係は分明でない。

W. Freeman Twaddell は On Defining the Phoneme, 1935 の第 5 章において、

Utterances are acoustico-articulatory events accompanying

social situations and correlated to them.

として, utteranceを私の言う「発話」と同じ1回きりの出来事, ただし, その音声的な面だけと定義している。さらに続けて,

In terms of that accompaniment and correlation, some utterances are alike and some are different in a given community. We thus set up as a criterion the observable responses of members of the community as hearers. By defining 'phonetic' as subsuming all observable phenomena associated with an utterance, we deduce that, as events, all utterances must be phonetically different. But in a given community, in terms of hearer's responses in recurrent social situations, all utterances which are the same are phonetically significantly alike; and all utterances which are different are phonetically significantly different.

と言っている。即ち all utterances which are the same というのは, 私の言う「同じ言語作品を含む発話」ということになるけれども, 彼は「意味」を exclude しているのも1つの原因で, 「言語作品」「文」を素通りして phoneme の考察に移っている。

私の言う「文」「言語作品」の概念を明確にしている言語学者もないことはない。私の気づいた範囲では Giulio C. Lepschy がそれである。La Linguistica Strutturale 1966 に modello の概念が見えるが, その英語版 A Survey of Structural Linguistics, 1972 では一層わかり易く説かれている。

(p.26) It would be useful to clarify the notion of model in linguistics, not only from a theoretical point of view, but also by considering its origin. Although the explicit discussion of the theory of models is very recent, its implicit use in linguistics is much earlier,

(p.27) From listening to an utterance like John rang yesterday one can gather various kinds of information. One can normally tell whether the speaker was a man, a woman or a child, and perhaps guess the age, But besides all this, and much more information, one gathers that what is (truly or falsely) said is that John rang yesterday. One can say that, in this sense, the utterance could convey the same information even if the speaker were different, if he used a different speed, loudness and pitch, if his voice were different, and so on. One would say that the utterance was the same—that one would have repetitions of the same utterance—even if these non-relevant features varied. As we have seen, there is abstraction of the relevant from the non-relevant aspects. What is common to different repetitions of an utterance is clearly abstract-

すなわち、彼が model と称するところのものは、私の言う「言語作品」「文」と極めて類似した概念である。しかし、彼は model が abstraction であると主張するに過ぎないけれども、私は、音声の面だけに限るとしても、発話の音声そのものの中に繰返し現れる社会習慣の特徴が認められ、それを「言語作品」または「文」の「かたち」(音形)と呼ぶのである。

Otto Jespersen は The Philosophy of Grammar, 1924, 1929³ の Chapter I で sentence を抽象的な概念を表わすために使っているように見えながらも、私の言う「発話」のレベルのものを意味していることもある。Building up of Sentences の section では、

Apart from fixed formulas a sentence does not spring into a speaker's mind all at once, but is framed gradually as he goes on speaking.

と言い、

(1) There I saw Tom Brown, and Mrs. Hart, and Miss Johnstone, and Colonel Dutton.

(2) There I saw Tom Brown, Mrs. Hart, Miss Johnstone, and Colonel Dutton.

の2つの例をあげて、

in the former I pronounce each name with a falling tone, as if I were going to finish the sentence there, while in the latter all the names except the last have a rising tone.

と言っている。私の術語では、(2)の発話は1つの文を含み、(1)の発話が音声のどぎれがなく発音された場合は4つの文が結合した「文結合」を含む、ということになる。¹³⁾ また、途中で言い直したような発話は、不完全な、或いは修正を要する文あるいは文断片を含む、ということになる。

Jespersen は Chapter XXII Classification of Utterances では、sentence と utterance を同じレベルの概念としているように見えながらも、次のように言っている。(p.307)。

A sentence is a (relatively) complete and independent human utterance—the completeness and independence being shown by its standing alone or its capability of standing alone, i.e. of being uttered by itself.

すなわち sentence を utterance であるとしながらも、capability とか uttered という語を使っているところを見ると、抽象的なものを考えているようにも見えるのである。

最後に Noam Chomsky の competence と performance の概念について検討してみよう。Aspects of the Theory of Syntax, 1965, 1973⁹ では次のように定義している(p.4)。

competence = the speaker-hearer's knowledge of his language¹⁴⁾
performance = the actual use of language in concrete situations

そして、同じページで次のように述べている。

The distinction I am noting here is related to the langue-parole distinction of Saussure; but it is necessary to reject his concept of langue as a mere systematic inventory of items and to return rather to Humboldtian conception of underlying competence as a system of generative processes. このように competence = langue ではないわけだが,¹⁵⁾ performance も parole とは異なり, language を実際に使うこと, 私の言葉で言えば「発話すること」であって「発話」ではないということになる。

彼はほかに sentence という用語を盛んに使うけれども, 私はその明確な定義を見付けることができなかつた。ところが, 次のように興味のあることを言っている (p. 11)。

The notion "acceptable" is not to be confused with "grammatical." Acceptability is a concept that belongs to the study of performance, whereas grammaticalness to the study of competence. The sentences of (2)¹⁶⁾ are low on the scale of acceptability but high on the scale of grammaticalness, in the technical sense of this term.

私の言葉に直せば, 「grammatical であるかどうかは文について言い, その文を含む発話については acceptable であるかどうかを言う。」とすることになろう。【すなわち, 同じ "sentences" について acceptability と grammaticalness とを問題にしている, 換言すれば「文」と「文を含む発話」との区別を明確に表現していない, ということになろう。】彼が sentence というのは, 私の言う「文」のように抽象的のものを指す場合が多いようだが, やはり「文」と「文を含む発話」とを明確に区別して定義しているとは言えないのではなからうか。¹⁷⁾ 【しかしながら, 言語の科学的研究においては, この両者の区別を明確に定義し, かつその区別を常に明確に意識していることが決定的に必要であると思う。】

本稿で私が強調したいと思ったのは, 我々が直接観察できるのは, 音声言語の場合, 発話を描いてはないけれども, 文をさしあたりの研究対象とすべきではないか, ということである。少なくともこの両者を明確に区別していないと, 研究が混乱に陥る。英語で sentence と言えば, 私の言う「文」を指すことが多いので, 大体その意味で考察しながら, 時々無自覚的に「文を含む発話」のことを考えたりすると議論が混乱すると思う。

たとえば「文」の「意義」の研究に際し, referent が問題となることがあり, これが具体的な事物を意味することがあるが, そういう意味の referent は「発話」の意味に関することである。音声の面で generative grammar が generate するのは, 私の言う「文のかたち(音形)」に近いもので, 「個々の発話の音声」ではない。意味の面でも, 「文の意義」は generate できても「個々の発話の意味」を generate することは不可能であろう。

I saw a man yesterday.

という場合の a man は definite である, なぜなら, 発話者は一定の人物を心に描いているから, というような議論があつたが, こうなるといよいよ大変である。なるほど, これが嘘でないまっとうな発話である限り, この発話者は一定の人物を心に描いているわけだが, この発話によってそれが伝達できるとは思っていない。私の定義に従えば, そういう表象は

この発話の「意味」にさえ含まれないから、「文」の意義にはなおさら含まれない。この発話に含まれる「文」の a man という断片の意義はやはり不定の人物とすべきで、発話者は自分が昨日会った人物を「ある人」すなわち不定の或人物として話題にのぼせたのである。

【上述のように「a man は definite である」などというのは、「文の意義」どころか「発話の意味」以上のもを問題にしながら、分析が混乱に陥ることに気付かぬ者である。】

すでに述べたように、同じ発話が2度と起こることはない。人間はオウムではなく、その発話活動は常に creative であるから、言語のこの“creative” aspect を強調しつつ an infinite range of sentences が発話されるという時、これは2つの意味に解される。この sentence が「文を含む発話」の意味であるならば、それこそその数は無限で、そういう sentences をすべて generate する grammar を作ることはできない。しかしこの sentence が「文」の意味であっても、その数は事実上ほとんど無限である。単語の数とそれを結合する規則の数が有限であるとしても、その組合せはほとんど無限であるからである。しかし、そういう sentences を generate する grammar は理論的にはできるはずである。実際には不可能に近いであろうが。ただし、或種の recursive rules の存在を指摘して、generative grammar によって generate される sentences の数が無限であることを証明し得たとするのは、当らないと思う。単語の数が有限であるとしても数万にのぼるのだから、文の長さを制限しなければ、無限に近い「文」（発話に非ず）を作ることができるわけである。

脚 注

*本稿は、昭和50年6月1日に日本英文学会において同じ題名で行なった公開講演の原稿である。今回の加筆はすべて【 】に入れて示す。

私が「発話」という用語を用いるようになったのは、W. Freeman Twaddell: On Defining the Phoneme (Linguistic Society of America, 1935)の翻訳をしているとき、utterance の訳語としてであったと記憶する。「発音」ではもちろんいけないけれども「発言」でも困る。要するに話すことだけれども「話し」でも具合が悪いからというので、「発話」という術語を作り出したのであった。拙訳『音素の定義』の「訳者の言葉」の p. vii には「記録によると、翻訳を完了したのは昭和23年(1948年)の1月である。」とある。

その後、小林英夫さんが『言語学通論、改訂第三版』(三省堂、昭和22年10月)に「発話」という用語を使っておられるのを知った。恐らく同著の第一版にも使っておられるであろう。

このたび日本ロマンス語学会で上梓される『小林英夫先生古稀祝賀記念号』に寄稿するようお願いを頂いたので、「発話」の用語の発案者であるわが尊敬する先輩小林英夫さんに、蕪構ではあるが「発話」を取扱った未公開のこの拙文を捧げさせて頂くこととした。

1) 拙稿「具体的言語単位と抽象的言語単位」(『コトバ』2の12号(昭和24年〔1949年〕12月)。拙著『言語学の方法』, p. 447~460.

私の最も新しい考えについては『言語の科学』第5号、昭和49年、の拙文参照。

- 2) 「社会習慣」は人間一般の、人間としての普遍的能力の上に立っている、と想定する。
拙文「言語・文化における人間性・個性・社会性」(『思想』, 1970年の6号)参照。
- 3) 拙著『言語学の方法』, p.197ff. など参照。
- 4) 発話は『 』に入れ、文および言語作品は「 」に入れて表わすことにする。
- 5) 拙著『言語学の方法』, p.194 ff., その他。
- 6) 皮肉でも嘘でもないまっとうな発話の場合でも、発話の意味(すなわち、発話者がその発話によって伝達しようとした意識内容)とその時に発話者の有する全意識内容とが一致するわけではない。従って、厳密に言えば、如何なる場合も表現者と発話者は別である、としなければならない。しかし、まっとうな発話では、発話者はその発話の「意味」を保証しており、保証するように見せかけているのではない。また、相手はその「意味」をまっとうに受取ることを期待しており、皮肉の発話の場合のように、相手はその逆の意味に受取ることを期待しているのではない。嘘の発話の場合には、相手はその「意味」をまっとうに受取ることを期待している。
- 7) 手紙に涙の跡をにじませるのは、その手紙に含まれる言語作品以外のものを伝達の補助手段としようとするものである。血書の如きは、その言語作品よりも、血で書かれているという事実そのものの伝える意味の方が大きいことがある。
- 8) 『言語学の方法』, p.196, p.200, p.222, ff. また、本稿注5)参照。
- 9) 『言語の科学』第5号の拙文 p.29, ff. 参照。
- 10) たとえば、その p.336, f. (『言語学の方法』, p.788.)
- 11) Selected Writings II, 1971, p.718

【この点に関連して、私は『月刊 言語』1976年 162の拙文 p.5 に次のように書いてある。

また、かれ〔ヤーコブソン〕はソスユールの langue と parole の代りに code と message を使い、チョムスキーの competence と performance に対比させつつ考察するのだが、右に挙げた論文を見てもわかるように、message は私の言う「発話」のレベルの概念で、「文」に当たる概念ではない。近頃(1971年) the coded matrices of The sentences と彼が言う概念が私の言う「言語作品」「文」に当たるかのようである。

ここに1971年の論文としたのは、上記 Selected Writings IIの p.720, l.7 を指したのであるが、そこに coded matrices というのは、むしろ「文型」のことではなからうか。】

- 12) Proceedings, The Hague, 1964, p.266, ff. および p.278, ff. の服部四郎の comment 参照。
- 13) さらに詳しくは、『言語学の方法』, p.457 参照。
- [14] “an ideal speaker-listener” に関するさらに詳しい規定については、同書 p.3, l.-8, ff. 参照。
- [15] ただし、langue は “a mere systematic inventory” ではなく、それらを結合して文とする規則も社会的なものである以上 langue に含まれているのではなからうか。なお Chomsky の “competence” も非常に適当な術語とは言えない。なぜなら、この語のふつうの言葉としての意味よりすれば、「人間に普通の生得的言語能力」をも、「その能力の上に立って成立しているところの、特定の langue の話し手の langue 的言語能

力」をも、意味し得て、その混同を引き起こし得るからである。後者はその *langue* の後天的習得の結果成立するものであるのに、人間の本性によって内から生まれるものだと説くとすれば誤りである。拙文「意味」(『岩波講座 哲学XI 言語』) p.289 参照。

【16】ここにいう “the sentences” とは次の2つである。

(i) I called the man who wrote the book that you told me about up

(ii) the man who the boy who the students recognized pointed out is a friend of mine

【17】Chomsky の上記 *Aspects*, p.131 には次のような言葉が見える。

The deep structure of an utterance is given completely by its Transformation-marker, which contains its basis. The surface structure of the sentence is the derived Phrase-marker given as the output of the operations represented in the Transformation-marker. The basis of the sentence is the sequence of base Phrase-markers that constitute the terminal points of the tree-diagram (the left-hand nodes, in (5)). When transformation-markers are represented as in (5), the branching points correspond to generalized transformations that embed a constituent sentence (the lower branch) in a designated position in a matrix sentence (the upper branch).

この文章をよく理解するには、同書の pp.129,130 の図を見る必要があるが、読者にはそれを参照されるようお願いしたい。上の文章で注意されるのは、utterance については deep structure と言い、sentence については surface structure と言って使い分けているばかりでなく、前者については an utterance と言い、後者については the sentence と言っていることである。ここで sentence と言うのは — 私の言う「表現者」という概念がない点などを除けば — 私の「文」と(決して同じではないが)等価値的な概念を目指したものと解釈できようし、utterance は、an という不定冠詞によって1回きりの performance を表わそうとしたものであろうから、「発話」に当たるものと解釈できよう。しかしながら、その deep structure は its Transformation-marker, which contains its basis で completely に表われるというのだから、そこには1回きりの要素はひとつも含まれていない。左側の base Phrase-markers を transform して行って右端の output に達する operations が performance であるとするならば、“the deep structure of an utterance”には *langue* 的なものしか含まれていない、ということになる。

また上掲の文章でもう1つの注意すべき点は、“a constituent sentence” “a matrix sentence” と言っている点で、この場合の sentence が私の言う「文」と異なることは明らかで、むしろ proposition に近い意味である。

なお、私の意義素論では、意義特徴は言語的事実の観察から帰納されるのであるが、generative grammar 系統の semantics では a priori に立てて来るのが普通である。このように上から下って来る semantics に携わる者には sentence の meaning を抽象的なものだとする者がある。たとえば、Manfred Bierwisch (John Lyons, ed.:

New Horizons in Linguistics, 1970, 8. Semantics, p.179.) は次のように言っている。

It should be clear, however, that in principle the meaning of a sentence can be derived in a definite form on the basis of the meaning of its words and its syntactic deep structure, ……

追 記

上記【 】の中はすべて昭和51年10月に書き加えたものだが、その後、Noam Chomsky の acceptability と grammaticalness について次のように考えるようになった。

“Acceptability”の test は「(文を含む)発話」について行なうのだが、そこに含まれている文(彼に言わせれば sentence)が grammatical なものでなければ及第しないはずである。

さて Chomsky の言う “grammatical sentences” は、彼が話し手の competence に対応すると想定するところの “grammar” が generate するものである。ところがそういう grammar は、私の言う「発話の音声」(すなわち1回きりの出来事)を generate できるはずがなく、「文のかたち(音形)」しか generate できない。すなわち、「発話」ではなく「文」しか generate できない。故に acceptability の test は要するに私の言う「文」の test に外ならないということになる。やはり、「文」とそれを含む「発話」との区別が明確になっていないと言うべきである。

(昭和52年6月24日 記)